

# 郷土室だより

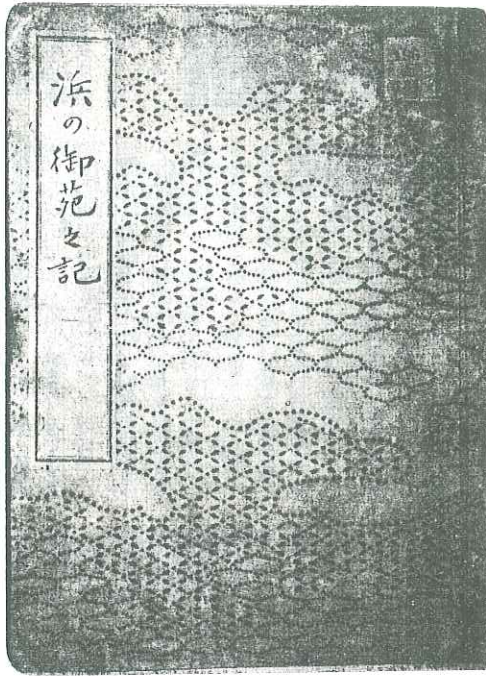
## 切絵図考証 一五

安 藤 菊 二

### 浜離宮庭園（続）

#### ○幕臣の浜苑拝観（二）

前号でちょっと触れたように、天保五年八月二日の、幕臣団の浜苑観覧は、幕府初まって以来の催しで、幕閣の枢要な地位を占める二人の人物が招待され、將軍から手厚いもてなしを受けた。殊遇に感激した寺社奉行



「浜の御苑之記」表紙（国立国会図書館蔵）

間部松堂の記文『浜の真砂』は前号で紹介した。町奉行筒井伊賀守政憲には『浜の真砂』の作があり、目付土岐頼旨には『浜の御苑の記』の著作がある。

同趣向の文章が続いては、読者の興も薄らぐであろうが、間部松堂の記文に続いて、今回は、土岐頼旨の記文を写しておく。

原本は国立国会図書館蔵本。頼旨の自筆清書本であろうか。表紙も特別あつたえの洲浜模様。巻頭に龍野城主藤原安董の序文、巻尾には北村季文の和歌、林大学頭の長詩一編、寺社奉行堀田正篤の跋文が添えてある。皆自筆で季文の和歌以外はそれぞれに印章が押してある。

そのうえ、書中随所に、画家に命じて描かせた十一面の画図が配されていて、読過の興を添えている。文章もまた流麗で、内容も体裁も完備した優れた記文をなしている。と評してよい。

× × ×

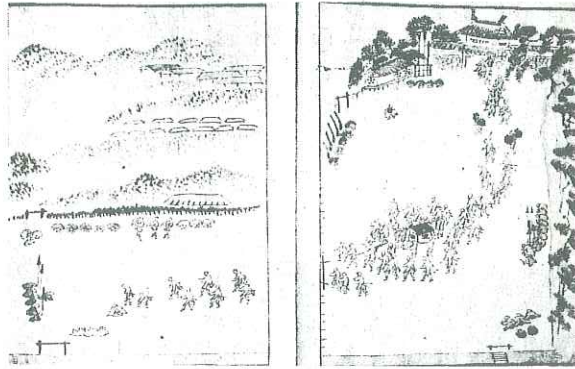
### 浜の御苑の記

土 岐 頼 旨

天保五年甲午八月下旬、近々浜の御園へ御所（將軍）の成せ給ふとき。寺社奉行の人々、林大学頭、大目付、町奉行、御勘定奉行、御目付の面々に、御園拝見の事をゆるさせたまふべき内々の御沙汰あり。同じき十九日、三奉行、大目付近々拝見の事、老職の月番加賀守忠貞朝臣ものにかいつけて申わたさる。大学頭は奥詰、御目付さし引のすぢにて拝見との御事にて、この中には書載られず、同じき廿二日いよいよ其事さだまりて、あくれば八月廿三日早天より空晴わたり、風さへなきていと静やかなるに、拝見の面々御所の御のりものよりは半時はやく、野服をつけて浜の御そのに出集る人々には、寺社奉行にて中務大輔安董脇坂、備中守正篤堀田、河内守正春井上、下総守詮勝間部なり。大学頭衡。大目付は大和守義雄村上、肥後守康貞佐野、河内守信政初鹿野、大隅守盛昭須田、町奉行主計頭忠之禮原、伊賀守政憲筒井、御勘定奉行は出雲守勝政吉、豊後守助弼留我、隼人正矩佳内藤、飛騨守茂村明榮、御目付にては五郎作景定山岡、中務贊成牧野市左衛門佐橋、主馬信豊大沢、主膳頼旨、平四郎重侯村瀬、庄左衛門正定羽太な

り。この内景定は浜の御園の掛りにて常の御先勤をもちかね、佳富、頼旨は御供をかねて拜見せり。

(。絵あり。將軍の乘輿匠苑到着の図)



寺社奉行相模守彦直土屋は病に臥し、大目付紀伊守廉直土屋は御木城にとどまり、御目付勝次郎景山曲河、小四郎利堅堀、播磨守安恵戸川は、この夏拜見せしかば、例のとのゐ所において、けふの拜見には洩けるなり。君には辰の刻時。八ばかりに西拈橋を出御にて、坂下御門・馬場先御門・八

代洲河岸・大名小路・すきや橋・尾張町・木挽町より、例の御道筋にて浜の大手の御門より御園に成らせらる。

御先に出る人々は、御輿の註進にて出迎奉る。御目付は大手の御番所のむかひ角になみゐて、御目見其外の人々は御成口の内に御目見つかふまつる。御用取次の御側衆美濃守忠篤水野御披露の事あり。御言葉をかけさせたまひて辰の半刻に入らせらる。

程なく浜の御殿奉行木村父子の案内にて表馬見所といふにあつまり、また御庭役所へ参り、ここにて刀をとり、わきざしばかりにて、さきの人々また案内して御園に入る。まづ三間橋通り八景山下通り行て観音堂を拜す。なべて唐木造りとなむ。堂のさまも今めか

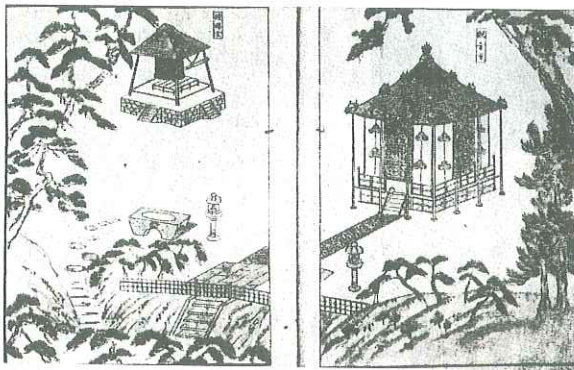
しからず、軒にかけわたしたる絵馬はみな世々の狩野の画だくみの筆なり。大きやかにはあらで、つくりざま常にはあらで殊勝なりき。堂の左に鐘楼あり。いつつともなくて古鐘ものさび

たり。播磨守俊光朝倉、安房守忠明内藤其外頭取奥の番など、ここかしこ教えみちびきていとまめやかなりし。

かかるほどに、筑前守茂矩美濃部をもて、御園のうち何にまれ、木々の実生を、みるにまかせてひろひとりてよとの上意をつたふ。おのおのかしこみ承れるよしをきこへあげて、をのがじし

木蔭敷のうちにもわけ入、ここかしこ木草のわかちもなくぬきとりたり。倉地・高橋などいへる人々御休息御庭之者支配竹のくしもて堀てもあたへ、又各のとりたる苗木をば、紙札に名を書つけて待たり。

(。絵あり。右観音堂、左鐘楼)



御鷹匠の頭戸田・内山等も、それらの事をもたすけものし、御小性御小納戸の人々も立交り、いかにも心置なくなどやうに仰ごともありけらし。あれこれと取はやし、さきになりあとにな

りてあないせり。

西南の芝生松の木間に出れば、ちかくは三縁山上の層塔、月のみさきの濟海寺の塔の棟の宝珠、久留米少将の火の見の櫓、高輪品川の駅路ひとめに見渡し、遠くは竹芝の浦のみるめかぎりなく、袖が浦荒蕪がさきなど見わたすほどに、沖につなぎたる大船どもも

はるかに見へ渡さる。その外には、けふの御かための番船、てんまく御船印の風になびきあへる、おごそかにもまたうるはし。

不二見山といへる高き築山にのぼりしに、折ふし西の空は朝霧にて、ふじのねは晝ああたりと心あてにのみにて見へぬぞ本意なかりき。

又ひんがしの芝生に下れば、このあたりなべて大松小松たちならびたるが汐風にとしを歴て、状かたちをのづから趣あり。

松風もなみのつづみもきみが代の千とせをうたふ友とこそ聞

それより海手の小橋をわたり、中の御橋の道すがら、はるかに御園の汐浜見へわたり、塩屋のけぶり立のぼりつつ、いとど秋晴ふかく覚ゆる。

やがて、御亭山の御やすらひ処見奉る。ここは東の海を見わたし、安房・上総の遠山はるかに横たはり、松(み)ほ、ささみほなどのみをつくし、いろ

いろ名もあるよしなれど得覚えず、左に深川洲崎のけしき見へわたり、ちかきころ長門少将が築出したるすなむらのあたりの石垣もさやかに見ゆ。松の木間より遠波の青く白く打寄るなど、ながめもあかずぞありける。爰を下りて、松の御茶屋といふを見侍るに、造作の懸りなしたるは申もさら也、蟬の御釘隠し、浪に千どりの御小襖に、蟹の御曳手打たる、月に霞のかたしたる御窓などもありき。御このみがましき事などもなく、なべても世にことなるとはあらねど、ひたすらに御威光の備りたるさま、ことさしていふべきにはあらで、只何となく恐れがましくぞ覚ゆる。

仰ぎみれば、めぐみもひろき浜びさし久しき代々にかたり伝へん。つばめの御茶屋もつづきてあり。はつかなる御上段あり。すみのかたに、大きやかなる三角のひきき御棚、陶物の二枚の横長き御小ふすまへ、白地に藍もて、ふじの山染たるいさぎよくまばゆし。釘隠しの燕赤銅にて腹はしるがね也。其うしろのかた御見合処にて、葦屋の御腰掛は御鷹のまうけにて御腰かけのはしに角切たる爐あり。御うしろは御鷹塙たねとなん。なべてひろびろとしたるつくりざまなりき。御その竹もてあみたる小窓も有。いづれの

御茶屋とても、そのさまなだらかにちあがりたる、まことに筆にも言ことばにもも尽すべからず。前にもいへるごとく、爰にさしていふことはなきものながら、ただ世の常に異なる、いといと尊し。御茶屋拜見のうちに己の時とき。十過にも成たりしか。いざ汐間もよし。とく釣せよとの事にて、御池のあたりに打出たり。ここにはところへ御釣台とて、三四間板もて張出、高々とてんまくを覆ひ、ここにて釣すべく御氣しき有とて、あなたこなたに餌箱釣竿もこのみにまかせてあり、大学頭朝之王殿、左京亮清尋高井、大膳亮詮道荒川など、かたはらにありて、つりいとのながきみじかきをもためし、餌さへつけて只竿を御池にうちいるのみみづからのわざなりけり。ほどもなく何やらむうけにさはりしかば、はやくも引上しに、尺にもあまれるめなどといふものをまづつり出たり。御前をもはばかりながら、うれしさに覚えず声をたてぬべし。釣たる魚も側らにてあつかい、針をとりいとをはづし、鯛かごといふものに入、誰は何をつりたりと其たびたびに御小納戸の衆けふの役にて註進し、和田何がしは魚の数をかいつけはしりまはり居たり。それより、八寸ばかりのことし子のいなをつづきて十六・七まで釣たり。

池広みつるいろいろも大君のめぐみに馴て数やそふらむ

同じ比、小の字嶋といへるところにて村上義雄が大きな鯛をつづきてふたつまでつり、羽太正定が是も大きな鯛ひとつつりたるを見て、今までは向ひの岸の御つりだいにありしかども藤棚下の字嶋こそ、いつも大魚はつるるなれ、ねがひてかしこへまいれかしと、御小性の衆すすむるまに、そのことを御聴に入、かしこに行たりしに、筑前守美濃部もて、大目付も大きなもの釣得、新役の庄左衛門も大きな

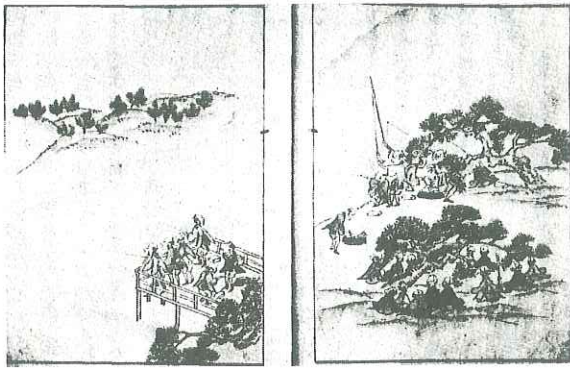
るも釣たりしに、など主膳はつらざるぞ。(。絵ここにあり)とく釣べし。やがて実父豊前守も出らんほどに、その前にと、ふたたびみたびの御氣しきのよしたつたへらるるに、かたじけなさも身にあまれり。

(。絵あり。釣聴で人々魚を釣るところ)

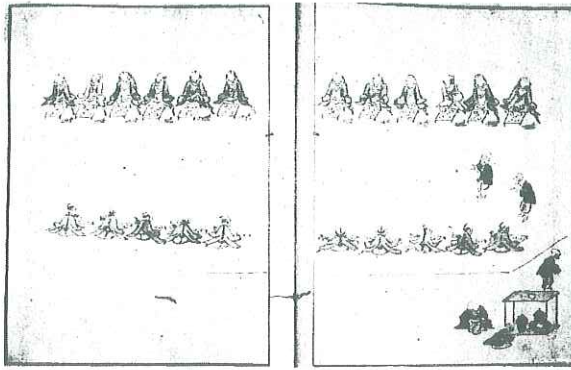
実父としひさしく御かたわらちかくめしつかはせたまへば、かかる御けしきもありけむと、君父のめぐみ骨にとほり、そぞろに涙ぐましく、御うけもはかばかしくはせざりけり。やがてひるのまうけに引べしと、頭取さしひきして、をのをつりたる魚をば、籠に入れ、手にたづさへてここをば出ぬ。かごは御庭役所に置つつ、いづれも元の馬見所につどひたるとき、播磨守・安房守草鞋のまま座につきて仰をつたふ。その趣は、思しめしにて御湯漬たまはりぬ。しかのみならず、御上りのしたてにて仰付られたるよしを述る。各打ぬかづきてうけたまはる。御膳は本膳二の膳ともに春慶塗の木具、御椀

(。絵あり。十二人宛左右に居流れて、膳を賜うところ)

は朱漆もて、鶴亀の絵かきたるなり。御鉢子は御紋の付たる塗銚子、御盃は常の塗盃なりき。いづれも御膳所の御調度となむ。御数寄屋よりはからくさ蒔絵の御棚などはこび来れり。坊主衆



御敷寄屋表ともにあまた出て給仕をつとむ。その御献だてには、本膳の置合は土佐煮鮑・にしめ・くしこ・汁は皮剝のこち・輪に切たる茄子、湯引は大やかなる丸きかたすの半べんに葛ねりかけ、上置はすりわさびなり。香のものは粕漬のもり口大根、二の膳は塩ふりやきの鯛、猪口は烹梅と麩を砂糖もて和たるなり。



大御酒は思めしにて、からきをこのみ、又あはきをよるこぶものもあらなんと、ふかき御心まうけにて、御眺

子ふたつ出たり。からきは正法院、あまきかたはつねにきこしめすところの梅酒とて、甘味もまた殊さらなりき。有合ふ人々の内にはからきを望み思ふもあるべかりしに、みな梅酒のみこちたく給はりしもいぶかし。

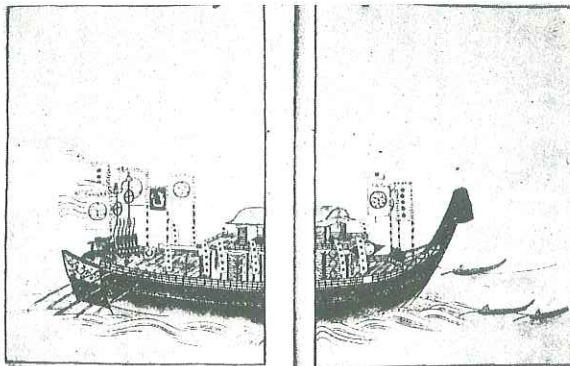
さて誰々は何程と、飯と汁の給はりたる数をひそかには御聴にも入にやあらむ。奥向よりのさし図也とて、給仕せし坊主衆がひとりごとにて聞てかいつくるなどめづらかなることなりき。ほどなく又御園へ入べしと、木村があないにて、つれてけさの如奥の衆跡さきにたち交り、こたびも三間橋をおたり、御馬場を拜見し、御馬見所にて千字文の御屏風拜見せり。

新銭座のさかいのほとりは御菜園にて、茄子・ささげ・冬瓜その外さまざまのものはたもの所得がほに生みのりたるも、さまかはりて心を伸るごとくなん覚ゆる。はたけの界は白及を植させられたり。御田には稲葉をよぎて八束ほのみりのりたる水田には、沢瀉・水椰の花さかりに咲つづき、御菓の畠には沙参・桔梗・はっか・黄芩などはいふもさらなり、からのやまとの千くさ百草数々にめも及ばず。只過にすぎ行心残りいはんかたなし。一ばんより八番までの御鷹場の堀、御鳥溜など見めぐ

り、栄螺山といへるその形したる高き山は、登りくだりとさかしきに、老たる人をば扶けなどして、やがて庚申堂へまうず。爰にてもさまざまの苗木堀とり、それより織どのへの道すがら梅の梢たちつづきて、春やいかにとばかり過行。そのあたりにも菓草の畑に秋の千草さきみだれたり。

織殿は、ひとかまへの賤が家ともいふべきさまにて、そのうちにおほくの男の子ども、はかまはきて機をり、糸とり、きりはたりの音かまびすしく、はたの台四つならべり。ひとりは小柳といへるものをる也とて、ここには上に綾とり居たり。其外はあやとりはななく、八丈しまはかま地・りうもんなど織て居たり。

又すこし高き所に、織はてたるあやにしき、さまざまの織物並べたる、具はあやはのかずかずめもあやに美し。目もあやに織五百はたのいろいろは秋のにしきも手にまかすらんそれより海手のかたに出れば、天地丸の御座船つなぎ置れしを、御あがり場より御船にうつり、残るくまもなく見侍る。こはけふ君のめさせたまふにはあらで、いづれもまだめなれぬ御ふねゆへ、見せさせ給ふためばかりにつなぎ置れしこそかしこけれ。御座所に



は夏の御櫂唐木に透たる御紋の御刀かけあり。純子の御まくら、沙狸々緋のてんまく、御弓鏡炮狸々緋の投鞆、数の御長柄、法螺、鐘太鼓かざりつらね御船印も大小さまざまなるうちに、白地に赤き御紋の大吹貝、金の幣の切さき帯にて左右にたてり。三桃燈・御船印、その外にも大旗小旗数しらず、むらさきのちりめんむの字かいたる四半の旗は、向井将監が家の規模とせり。将故ある事とてかの家の規模とせり。将むも御上乘に伺公せり。水主は白地に藍もてさがり藤染出したるひとへ衣

を着て、とものかたにうづくまり居たり。そのかたわらに麒麟丸といへる御船もつなきてありき。是にも御船印御幕のかざりうるはしくふたつの御船に彫りたる物ども金具などきらめきつつ

(。絵あり、装ひたる朱の御座船)

夕波にうつるさま、げにもかく治れる御代の御いきほひ、めもあやにいさましく、世のうき事も常の心をわするるばかりになん。

棹させばたつの都もめの前にうかむ御船のみるめ尽せぬ

それより塩やく小屋、潮くむところも見るに、御池のうしほをくみて、籠もて砂にこし、塩屋にとり入、大なる釜にて烹、それよりはいかにせしにやあらん

(。絵あり、漁獲)

雪とあやまつばかり、はや塩に成たるがいくつともなく籠につみて有けり。

又曲物にいらりたるも数々ありしを、それに菊の花折そへて、けふ拜見のともがらに、ひとつひとつ賜はりけり。そのあたりのさま、賤が伏家のいやしきたつきそのままに見そなはし給ふ御心しらひ、よにありがたき事ども、いふもさらなり。

たみくさとともにたのしむ心をももしほの桶のくみてこそしれ  
そこを出て新種の口とやらむを過て

御つたへ橋をわたり、ふたたび松の御茶屋にいたるべしとて、おのおのなみ居たる時、播磨の守安房守来りて、殊更の思召にてたまはるよしをつたへ、御茶屋の奥に大やかなる器をす多たり。

播磨守安房守蓋あけて見するに、かみにすえたるは御菓子、中は御にしめ

のもの、すえはすしなり。いづれも思ひがけざるたまものにて、かしこまり悦びつつ、舞踏の心をのべてぬかづきぬ。岡持づめの御くわしは、鳴戸まきぬ。かすていら・紅ずし・まんちう、御にしめは紅青すだれ・蒲ほこ・てりや

きさわら・いろつけやきの鮎・酢蓮根にしめ・河たけ、御すしは、鯛・車多び・あら鮑・薄麩のやき・玉子たてせうがなりき。それよりまた釣にかかれるが、汐合やあしかりけむ、さぎのほどにはなけれども、いな・はぜ・さつばといへる魚など、ななつやつ釣出たり。

君にははじめより中嶋の御茶屋にわたらせ給ひ、御覧あり。その時、大なる岡持に小指のほらほなる小蛤を入て賜ふよしを安房守仰せつたふ。また先にぬぎとりたる木々の実生は、御庭のものを支配などいふ人々に、各ささやかなるかみふだつてあづけ置得しかば、御いとまたまはるころには、そがままにわたしやすらむ。数多きままに

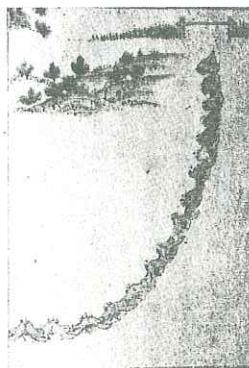
入ちがひやすらん。いとこころもとなしなど、ひそかに思ひ居たりしに、いづしか御まへにてみな見わけさせ給ひて、白き盤銅に裁つて、各の姓名を木札に書てたまはりしぞ、誠に思ひよらざりけり。こはわきてふかきおおん心まうけにて、たれたれものをがすみかにうつしうえなば、永きたまもの子供にもつたへ、けふのかしこさのあたりつたへにもせよかしとの御心ばへなるとなん。かかる恵のくまなきに、みな芝生にかしらさしあてつつ、感涙とともにぬかづきし。

かけてしる恵の露の玉くしげふた葉に高き陰をこめつつ

ほどなく築地の御堂の申の刻告る鼓きこえしかば、申書をはじめ、けさよりくさぐさの御心しらひ、さまざまの御けしきどもにて、還御の程もそなはせ給はんかしこみを、頭取もて御聴に入しかば、をののつりたるるさまなど御慰にもなり、こよなく御興にもいらせ給ふままに、日のかたぶくにもいとせたまはで、ただあなたより御沙汰あるまでは、はばかりなく釣べしとの御旨をつたふ。いづれもかたじけなさのあまり、御まへをも打わずれ、うつつ心もなく興に入ぬ。  
はや西の山のはに日のかげも見へずなりゆくころ、還御の御いろめきとて

御暇たまはり、御園を出る時、御成口のうちへ寺社奉行をはじめわがともがらまで、ついでをみださず居並びて、御用取次の御側衆豊前守朝旨土岐へ、けふのかしこまりを申て後、頭取その外奥の衆にも、それぞれ礼をのべ、をのの御庭口をまかで、ひかへ処に退く。還御の御目見はなく、浜掛りの景定ばかり、常のごとくに御目見す。住富とやつがれば、成らせ給ひし時の御道筋を西括橋までしたひ奉り、惣御供と御道具を引まといひ、御本城へ出、戌の刻過るころ家に、

(。絵あり、三二人の人達、円陣を作り礼を述べるところ)



帰りしに、賜りたる品々は、御徒目付三太夫三十郎などあつかひて、とくに廻りていたり。わが宿のところせき置ならべて、うからやからも打拜み、けふのおおむめぐみをかしこみけり。つりの魚も選御の前に御覧ありて、

其ままたまはりしが、ことさらに数多かりしかば、親族にも御恵をわかちけり。明日廿四日御本城の間にて、加賀守忠貞朝臣へ、きのふの御礼さこへあげたり。景山・利堅・安恵が夏拜見せし時は、さしかりたる事にて、かねての御まうけにはなかりしままにべちにたまものもなければとて、五六日すぎて御園の実生の木をとりよせさせたまひ、各にひと鉢づつたまはり、紀伊守廉直は御城に残りたりとて、吹上の御園の榎の実を手づから蒔かせたまひしが、尺にもあまり伸たらたるを賜はりたり。誠にもるるかたもなき御仁徳をあふぐもをろかにこそ侍れ。さきにたまはりたる小蛤をば刀の鞘にぬりこめたり。けふの忝さをもながくわするまじとの心にこそ。なをくさぐさの事かいもらしぬるも多く、かしこさはなかなか筆にも尽すべきにはあらねど、わが子うまごのかたりぐさにと、其あらましをば書つくるなりけり。于時天保五年五月八月廿三日

源頼旨誌之。

資料案内

今回は、郷土資料室で作製している「新聞切抜」資料を紹介することとする。

郷土資料室では毎日、新聞の記事の中から、中央区に關係のある記事を切り抜き、更に新聞に入ってくるチラシなども含めて地域別の資料を作製している。新聞の記事は、最新の話題・歴史には残らないような町の話題など、埋もれていってしまう地域の歴史をとどめるのに、有用な資料と言える。銀座などは、中央区のというよりは、東京の、日本の繁華街の中心的存在なので、新聞記事も多く、「銀座の一年」と題して一年毎に編集して本にしており、すでに一八冊を数えている。

△地域別▽

中央区(広域)	1冊	昭51~52
日本橋地区		
日本橋周辺	4冊	昭31~52
兜町	1冊	昭36~48
人形町かいわい	1冊	昭36~46
浜町河岸・柳橋	1冊	昭32~44
付・花火		
八重洲周辺	1冊	昭36~44
京橋地区		
京橋地区		

京橋	2冊	昭50~53
銀座の一年	18冊	昭31~53
わが町銀座 (池田弥三郎著)	1冊	昭51~53
サンケイ新聞連載		
築地・明石町	1冊	昭36~46
築地・新富町	1冊	昭32~49
一月島地区		
佃島と佃の渡し	1冊	
月島・晴海	1冊	昭36~42
月島地区 (佃・月島・晴海)	1冊	昭39~53

△主題別▽

堀出し物語	1冊	昭31~50
中央卸売市場		
付・くらしの魚	1冊	昭36~52
シリーズ		
「ストリート」	2冊	昭50~53
読売新聞連載		
あの橋・この橋	1冊	昭36~43
演劇・芸能	1冊	昭36~52

◇郷土資料館オープン!

築地四丁目の築地川東支川を埋立てて建設がすすめられていた築地社会教育会館が完成し、その一階に郷土資料館がオープンした。江戸時代(文化文政期)と、現代の中央区の立体模型や

江戸時代の水道木桶などに混って、京橋図書館所蔵の錦絵や拓本なども展示されている。郷土資料館には文化財調査指導員として、『中央区三十年史』を編纂された川崎房五郎先生と、角田和雄先生が勤務にあたっておられる。開館時間は、九時から五時まで。閉館日は、第三日曜日。その他の週は月曜日。

◇東京を語る会 第30回

日時 六月二十八日(土)  
午後二時~三時三十分  
演題 「古地図談義」

講師 岩田豊樹氏(古地図研究者)  
岩田豊樹氏は、日本でも有数の古地図の蒐集家で、日本地図資料協会名誉会長、狂蒐倶楽部会長でもあります。古地図に関する著作も多く『古地図の知識一〇〇』(新人物往来社)、『大江戸絵図集成(解説)』(講談社)などに加え、最近では『日本書誌学大系11』(青裳堂)として『江戸図総目録』を刊行されました。  
江戸・東京の珍らしい地図を実際に見ながらお話を聞く予定です。お誘い合わせて御来場ください。